

遣欧少年使節オペラ 映画化へ

来月の無観客公演 PRで配信

16世紀末、ローマ教皇に謁見して帰国し、禁教令下の祖国で数奇な運命をたどった天正遣欧少年使節の4人を描いたオペラ「忘れられた少年」が、映画化されることになった。5月にそのPRも兼ねて佐世保市でオペラの無観客公演をし、インターネットで同時配信する。



オペラは1990年の波佐見町での初演後、国内外で上演されてきた。4人の少年が渡欧してヨーロッパ各地で大歓迎を受けたものの、帰国後は迫害を受ける運命を描く。NPO法人東京オペラ協会が上演150回を記念し、映画化に向けて動き出した。

協会代表で、台本・総監督を兼ねる石多エドワードさん(73)は、波佐見に住む家族との間で二重生活しながらオペラの指導で全国を回っている。天正遣欧少年使節という題材について「現代においても忘れられ

⑤合唱メンバーの公募に応じた人たちに石多エドワードさん(左奥)が映画化の意義を語った。福岡、佐賀、愛媛などからも希望者が集まった。3月6日、波佐見町、石多さん提供
 ⑥1993年9月の東京公演の際のパフレット。映画監督の山田洋次氏、作家の加賀乙彦氏らが期待の言葉を寄せている

来春撮影開始 4人の数奇な運命「生き方を肯定」

てはいけない少年たち」と語る。

使節のひとり中浦ジュリアンは現在の西海市に生まれ、帰国後も信仰を貫いて西坂の丘(長崎市)で殉教した。波佐見出身の原マルチノはマカオに追放され没した。現在の宮崎県生まれの伊東マンシヨは日本各地で布教後、長崎で病没。キリシタン大名・大村純忠の名代、千々石ミゲルは、唯一棄教したとされる。「4人それぞれの生き方を肯定したい。人間賛歌の作品です」と石多さん。

5月8日午後5時から佐世保市のアルカスSASEBOで開く公演は、来年春の撮影開始に向けた第一歩となる。全編約2時間半を30分に編集した動画を、海外での宣伝にも活用する。撮影は使節らが訪れたヨーロッパ各国と国内で行い、舞台公演のシーンと織り交ぜて映像作品に仕上げるという。

協会は合唱メンバーを大人と児童、それぞれ7〜8人募集している。練習は土曜の夜に波佐見町で。衣装は無料で貸し出す。問い合わせは石多さん(0990・4980・2369)へ。

(原口晋也)